

Title	臨床哲学的余白 [Vol.5]
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 5 P.38-P.38
Issue Date	2000
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/3525">http://hdl.handle.net/11094/3525</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

田村恵子「ホスピスケア」、『看護白書』平成11年度、日本看護協会出版会、1999年

Hiroki Kagawa, Kanaki Sakai, Takahiro Tsuboyama, Noriyuki Hayashi "American terminal care" 1999.

南吉一「高齢者のQOLを考える。～ターミナル患者のQOL～」、『臨床老年看護』Vol. 6、No. 1、日総研出版、1999年、pp.114～120

村田久行「対人援助における“聴くこと”の意味－傾聴ボランティアの実践から－」、『社会福祉実践理論研究』第7号、1998年、PP.1-11

鷺田清一『「聴く」ことの手帳－臨床哲学試論』、TBSブリタニカ、1999年

# 臨床哲学の余白

『メチエ』は2000年冬の号をもって発刊1周年を迎えた。編集者の不手際もあって冬の号であるにもかかわらず発行が3月にずれこんでしまったのが残念だ。今回、大学院生会沢久仁子さんから力作が寄せられ、前号で予告した「セクシュアリティ」特集は次号に延ばし、急遽報告を全文掲載することになった。会沢さんとともに研修に参加した森正司さんの報告も次号に掲載する予定である。

「考えること」と「伝えること」は一見無関係であり、「報告」というものは思考の介在しない中立的で透明な作業であると考えられる人もいるかもしれない。今回の報告、前号に掲載されたイギリスでの「哲学プラクティス国際会議」の報告、そして日本倫理学会「ジェンダーとセクシュアリティ」部会についての報告もそうだが、個々の現場でどんなに有意義な経験がなされようとも、それがその経験の外部へと一旦押し出されない限り、一回的なものとして終わってしまう。現場に身をおきそこから考えるということは確かに臨床哲学の出発点といえるが、現場で思考することは哲学だけの特権的な事柄ではない。むしろ、自分の

目で見、体で感じたことを別の場所に伝えるということは、単なる取材・記録・報告という作業を越えて、まさに臨床哲学の本質をなす活動なのかもしれない。

臨床哲学の授業の場でなされるケアと教育についての議論を聞いても、「現場にいない人にその現場の経験をいかに伝えるのか」ということが中心的な問題となっている。現場に関わろうとする者にとって、伝達することにつきまとう「媒介性＝非直接性」は無視することのできない本質的な問題である。哲学もまたそうした問題に「経験と言語」、「言語と思考」という枠組みで長らく取り組んできたはずだ。

今回会沢さんは入念できめ細やかな報告を展開されており、読者は記述の細部にまで彼女の思考の痕跡を辛抱強く読みとる必要があるだろう。他者の思考と問いに付き従うことはそれ自身ねばり強い思考力を要求されるものだ。そしてそうした思考を伝えてくれる積極的な応答を『メチエ』は歓迎する。

来年度の臨床哲学の授業のテーマはまさに「伝えるということ」である。(編)